説教20200607出エジプト記３：１‐６ ヨハネ３：１‐１６ １９４　21-193 21-69

「新たに生まれる」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　先週、木曜の定例祈祷会のあと、私は買い物に出かけました。いつものことでしたが、その日は、店の前を通り過ぎて、ラクテンチの山の方へと向かわせられました。そして、朝見川の支流をさかのぼり、だんだんと森は深くなり、川沿いの道はやがてうっそうとして来て、左右の雑草はゆく道を覆うように茂って来たのです。

　私はその時、緑に囲まれた場所にいて、次のように思いました。「もし、ここで毒蛇にかまれて、倒されたら、この体が別府不老町教会に戻れなくなるぞ。それはいけない。」そのように私の心は淡々とつぶやきました。その時、毒蛇に対する恐れは全くありませんでした。そして、冷静に左右の雑草をかき分けながら、無事に、この体を携えて、教会に戻ることが出来ました。

　私たちクリスチャンは、この地上においてはこのように**肉の命**を生きていますが、確かに**霊の命**に生かされてもいます。私はこの森の中の体験でそのことを実感しました。そして蛇との交流の時間を与えて下さった主なる神に感謝します。と言いますのは、今日の聖書箇所で、わたしたちは蛇のことを聞かされるからです。蛇は私たちの肉の命を奪うことも出来る、怖い存在です。又ずる賢くて、アダムとイブをそそのかして、罪を犯させるきっかけを作りました。ですから、主なる神は、蛇を呪われるものとし、生涯はいまわり、塵をくらうものとされたのでした。しかし、未来永劫そうであるわけではなく、イエスキリスト様の時には、蛇は、塵を食べ物としつつ、害をなすことはなく、平和のうちに小羊たちと共にいる者とされるのです。

　今日の聖書箇所を語るにあったって、この蛇のモティーフは役に立つと思いますので、もう少し、聖霊なる神に満たされつつ、蛇と格闘した森の中での出来事を、言葉にならない言葉で語ってみようと思います。森の中で私の**肉の命**は倒されるのではないかと思われました。しかし、他の命、すなわち**霊の命**が圧倒的にわたしを守ってくれました。その時**肉の命**は、**霊の命**に包み込まれて守られたのでした。肉の命と霊の命は確かに違うものですが、かといって両者は全く二つに分離出来る者でもありません。霊と肉は一体となって一つの所に宿っているのです。霊と肉とは切り離すことが出来ません。ですから、今回、霊の命が肉の命を守ってくれたのだと思います。

　では、本日の新約の聖書箇所に聞いてまいりましょう。

ヨハネ福音書３章１節にニコデモという人が登場します。ニコデモは聖書中でヨハネ福音書のみに三回登場致します。この三章が最初で、二度目は７章、そして三度目は１９章です。ニコデモはよいファリサイ派として、広く知られていると思いますが、２章２４節によりますと、イエスご自身は、ニコデモを信用しなかったのでした。確かにニコデモは、７章と１９章で、イエス様に理解を示し、同情を寄せていますが、それでもイエス様はニコデモを信用しなかったのです。それはなぜでしょか。それはニコデモが偉い人であったからです。彼はユダヤ人の議員でありました。彼が議員であったところの議会はサンヒドリンと申しまして、７０人から成るユダヤの最高法院でした。そして、全世界に拡がるユダヤ人たちに対して、とりわけ宗教上の司法権を持っていたのです。つまりニコデモは、ユダヤ人社会における上層部のファリサイ派で、具体的に事細かく規定されたユダヤ教の律法をもって、人々を裁いて来た人だったのです。彼にはこの世での権力も名声を十分にあって、それに守られて、人生を送って来た人でした。

　しかし、そんな人生を送って来た彼には、何か満たされないものがありました。ですから、彼は夜に、こそこそと人目を忍んでイエス様に合いに来たのです。彼がイエス様に引き寄せられたのは確かに恵みでありましたが、彼はどっちつかずでした。今日の聖書箇所はイエス様とニコデモの会話によって進んで行きますが、ニコデモは終始どっちつかずです。具合が悪くなれば、彼はすぐにサンヒドリンの議員としての立場に戻ることでしょう。ニコデモがイエス様に投げ掛ける質問は、何か試し行動のように思われます。イエス様にこんな質問をしてみれば、彼はどう答えるだろうか、といったように、心の中で値踏みをしながら、質問をしているのです。そのことをイエス様は十分に承知されています。ニコデモから「あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています」と言われても、イエス様はそれに直接お答えにはならず、「はっきり言っておく、人は新たに生まれなければ、神の国を見ることは出来ない」とお答えになられました。そしてそれに対してニコデモは「もう一度母親の胎内に入って生まれることが出来ましょうか」と答えます。

ニコデモの頭の中は何かもやもやして、はっきりしない思いに取りつかれているようです。そしてそのもやもやを、イエス様と直接会って、話をすることによって解決したいと思っていたのでしょう。

　ニコデモは律法に通じた教師でありましたので、この時イエス様から聞いた話は、ずっと生涯にわたって聞き続けて来た話でもありました。ニコデモは新たに生まれるという**再生、再創造**という思想について無知ではありませんでした。ユダヤ人の間でも「ユダヤ教を受け入れた改宗者は、新しく生まれた子供の様である」と言われておりましたから、ニコデモが「新たに生まれる」ということを聞いたのは、決してこの時が初めてではないのです。しかし、ニコデモは今まで聞いてきた「新たに生まれる」ということを完全に受け入れて、信じることが出来ていなかったがゆえに、イエス様に対していろいろと試みの質問をして、まことのことを聞き出して安心したいと思っていたのでしょう。ここら辺にニコデモの態度のどっちつかずのゆらぎが見受けられます。

　イエス様は、ニコデモのこのようなどっちつかずの揺らぐ態度を見破っておられます。１１節でイエス様は、はっきりと申し渡されるのです。「あなた方は、私たちの証を受け入れない。」ここに出て来るあなた方とは誰でしょう、そして私たちと誰でしょうか。分かり易く区分すれば、あなた方とは、この世の議員になることで満足しているような、この世の栄誉や栄達を追い求める人々です。そして私たちとはクリスチャンのことです。クリスチャンとは何でしょうか。それは教会で、水と霊によって新たに生まれた人々のことです。私たちクリスチャンは水と霊とによって新たに生まれたことを洗礼式によって、公然とこの世に示すことを経て、今ここにいます。そして毎主日に自分の口を用いて使徒信条を唱えることで、その信仰を公然とこの世に向けて言い表しているのです。クリスチャンである資格は難しい事や複雑なことではなく、ただ、イエス様をただ一人の救い主と信じて、それを公然と世に示し続ける者たちのことです。クリスチャンであることをただ心の中に秘め続けているだけでは十分ではありません。私たちはクリスチャンであることを公然と、この世にあって示し続けることで、かえってこの世における位置づけが明確になり、そしてその世における**肉の命**の歩みも、**霊の命**に抱かれつつ、全うしていくことが出来るのです。

　１４節からイエス様はいよいよ、蛇のモティーフを語られます。ここで語られるモーセが荒れ野で蛇を挙げられる、こととは、本日の招きの言葉、民数記２１章８～９節によるのですが、実はこの民数記の記述の解釈に、ニコデモらファリサイ派の人々はずっと頭を悩ませていたのです。この旗竿の先に掲げられた青銅の蛇の像はユダヤ人の間でずっと偶像崇拝の対象となっていました。その偶像崇拝は出エジプトの出来事から数えて５００年以上もの間、ヒゼキヤ王が紀元前７００年頃に止めさせるまで、延々と続けられたのです。そしてその偶像崇拝自体は終わったとはいえ、ファリサイ派はこの旗竿の先に掲げられた青銅の蛇の像に対して、確たる神学的な意味付けを与えることが出来ませんでした。そこの処のファリサイ派の弱みもイエス様は承知されておりましたが、そのうえで、イエス様は自分こそがその蛇のように挙げられるべきものであるとおっしゃったのでした。私たちはここに、人となられたこと以上の謙遜をイエス様に見るでしょう。イエス様は呪われた蛇の命をも失われることを望まれず、自分自身が蛇のように呪いの対象となって旗竿の先にかけられることを望まれたのです。そこにはイエス様の父なる神への全き信頼がありました。旗竿の先にあげられるとは、神の国に挙げられることにつながっていることをイエス様は父なる神を信じて悟りました。旗竿の先で罪ある肉の死が死んだのです。そして**霊の命**と共に肉の命も、神の国へと挙げられたのです。

　１６節では上に居られる父なる神が、そのことを別の表現を使って述べられています。父なる神から生まれた独り子というのは、ただ一人っ子という意味ではなく、永遠の霊の命が、歴史を通して、ただ一回生まれたということです。そしてその独り子を父なる神は私たち人間を救われるために、この世に下されたのでした。私たちは神の前にイエス様のように謙遜になって初めて、そのことを心から信じることが出来ます。今日の旧約の聖書箇所でもモーセが父なる神の前で履物を脱ぎ御前にひれ伏した時、初めて父なる神はアブラハム、イサク、ヤコブの生ける神としてその御姿をモーセに現されたのです。

　私たちの兄弟アウグスティヌスは、ニコデモのどっちつかずの態度を、一言、傲慢であると断じました。私たちもこの世の肉の命の歩みにおいて身につけてしまう傲慢さから逃れるため、そして謙遜な**霊なる命**を日々新たに着せて頂くために、十字架を見上げつつ神の子供として共に歩んでまいりましょう。

お祈りいたします。天に居ます私たちの父なる神よ。

今日は、この兄弟姉妹たちを御前に集めてくださいましてありがとうございます。先週の聖霊降臨日から一週間、私たちは聖霊に満たされて恵みの日々を送らせて頂いておりますことを感謝いたします。又、今日読まれました聖書箇所にて、あなたの御子の謙遜な姿をあらわして下さり感謝いたします。私たちはややもすると自分を誇ろうとし日々罪を犯してしまう弱いものです。どうか、今再び私たちに御子の謙遜の御姿を想い起こさせ、その従順に倣うことが出来るようにして下さい。

　この聖霊降臨後の日々、私たちが全地を吹きすぎる風のように、聖霊に抱かれながら、あなたの福音を告げ知らせていくことが出来るようにして下さい。

既にこの地を去られました兄弟姉妹を覚えます。どうか彼らをも一つの同じ聖霊で満たし、私たちが一つの同じ望みのうちにこれからも歩んでいくことが出来るようにしてください。

これらの願いを、私たちの救い主イエス・キリストのみ名によって祈ります。